

第三章 貨幣または 商品流通

第一節 価値の尺度 (p125)

(1) 簡単化のために、金を貨幣商品として前提する。

金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること、または、諸商品価値を同名の大きさ、即ち、質的に同じで量的に比較可能な大きさとして表すことにある。こうして、金は諸価値の一般的尺度として機能し、ただこの機能によってのみ、金という独自の等価物商品はまず貨幣になるのである。

(2) 諸商品は、貨幣によって通約可能にんるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、従って、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の商品をも自分たちの共通な価値尺度即ち、貨幣に転化させることができるのである。価値尺度としての貨幣は、諸商品の内在的な価値尺度の、即ち、労働時間の、必然的な現象形態である。(p125・注 50 参照)

(注 50) なぜ貨幣は直接に労働時間そのものを代表しないのか、…という問いは、全く簡単に、なぜ商品生産の基礎の上では労働生産物は商品として表されなければならないか、という問いに帰着する。なぜならば、商品という表示は商品と貨幣商品とへの商品の二重化を含んでいるからである。または、なぜ私的労働は、直接に社会的な労働として、つまりその反対物として、取り扱われることができないのか、という問いに帰着する。…

たとえばオーエンの「労働貨幣」が「貨幣」でないことは、劇場の切符などが貨幣でないのと同じ事だ、ということである。オーウエンは、直接に社会化された労働を前提しているが、それは、商品生産とは正反対の生産形態を前提するものである。労働証明書は、ただ、共同労働における生産者の個人的参加分と、共同生産物の消費充当分に対する彼の個人的請求権とを確証するだけである。

(3) 一商品の金での価値表現 $- x$ 量の商品 A = y 量の貨幣商品 $-$ は、その商品の貨幣形態またはその商品の価格である。いまでは、鉄価値を社会的に通用するように表わすためには、 1 トンの鉄 = 2 オンスの金というような 1 つの単独な等式で十分である。

この等式は、もはや、他の諸商品の価値等式と一緒に列をつくって行進する必要はない。というのは、等価物商品である金は、すでに貨幣の性格を持っているからである。

それゆえ、諸商品の一般的な相対的価値形態は、いまでは再びその最初の単純な、または個別的な相対的価値形態の姿をもっているのである。他方、展開された相対的価値表現、または多くの相対的価値表現の無限の列は、貨幣商品の独自の相対的価値形態になる。

しかし、この列は、いまではすでに諸商品価格のうちに社会的に与えられている。物価表を逆に読めば、貨幣の価値の大きさがありとあらゆる商品で表されているのが見出される。

これに反して、貨幣は価格を持っていない。このような、他の諸商品の統一的な相対的価値形態に参加するためには、貨幣はそれ自身の等価物としてのそれ自身に関係させられなければならないであろう。(p126)

(4) 商品の価格または貨幣形態は、商品の価値形態一般と同様に、商品の、手につかめる物体形態からは区別された、従って、単に観念的な、または想像された形態である。

鉄やリンネルや小麦などの価値は、目に見えないとはいえ、これらの物そのものの中に存在する。この価値は、これらの物の金との同等性によって、いわばただこれらの物の頭の中にあるだけの金との関係によって、想像される。それだから、商品の番人は、これらの物の価格を外界に伝えるためには、…これらの物に紙札をぶらさげるかしなければならないのである。商品価値の金による表現は観念的なものだから、我々は、この機能のためにも、単なる想像上のまたは観念的な金を用いることができる。商品の番人が誰でも知っているように、彼が自分の商品の価値に価格という形態または想像上の金形態を与えても、まだまだ彼はその商品を金に化したわけではないし、また、彼は、何百万の商品価値を金で評価する為にも、現実の金は一片も必要としないのである。それゆえ、その価値尺度機能においては、貨幣は、ただ想像されただけの、即ち、観念的な、貨幣として役立つのである。…だが、価値尺度機能のためには、ただ想像されただけの貨幣が役立つとはいえ、価格は、まったく実在の貨幣材料によって定まるのである。たとえば一トンの鉄に含まれている価値、即ち、人間労働の一定量は、同じ量の労働を含む想像された貨幣商品量で表される。だから、金や銀や銅のどれが価値尺度として役立つかによって、1トンの鉄の価値は、それぞれ違った価格で表されることになる。即ち、全く違った量の金や銀や銅で表されるのである。(p127)

(5) 従って、もし仮に、二つの違った商品、金とか銀が、同時に価値の尺度となるならば、全ての商品は二つの価格を持つことになる。— 金価格が一つ、もう一つは銀価格である。これらの価格表現は、金に対する銀の価値比率が、例えば、15 : 1 で変化なく維持されるならば、静かに並列する。しかし、この価値比率の変動が起きるたびに、それは諸商品の金価格と銀価格との比率を攪乱して、この事実によって、価値尺度の二重化がその機能と矛盾することを示すのである。

(注 53/p128 ~ p129)

(注 53) …エドワード 3 世からジョージ 2 世の時代に至るまで、イギリスの貨幣制度の歴史は、金と銀との価値比率の法律による固定と金銀の現実の価値変動との衝突から生ずる絶え間ない混乱の連続をなしている。ある時は金が、あるときは銀が、高すぎる評価を受けた。低すぎる評価を受けた金属は流通から引き上げられ、融解され、輸出された。そこで両金属の価値比率は再び法律によって変更されたが、この新しい名目価値もやがてはもとの名目価値と同様に現実の価値比率として衝突することになった。…しかし、こうした歴史的経験は、簡単に次のことに帰着する。即ち、法律によって 2 つの商品に価値尺度機能が認められているところでは、事実上は常に一方の商品だけが価値尺度としての地位を維持する、ということである。

(6) 価格が決まっている商品は、すべて、 a 量の商品 $A = x$ 量の金, b 量の商品 $B = y$ 量の金, c 量の商品 $C = z$ 量の金という形で表される。ここでは、 a, b, c はそれぞれ商品種類 A, B, C の一定量を表わし、 x, y, z はそれぞれ金の言って一定量を表わしている。それ故、商品価値は、いろいろな大きさの観念的な金量に転化されているのであり、つまり、商品体が種々雑多であるにも係わらず、同名の量に、即ち、金量に、転化されているのである。このようないろいろな金量として、諸商品の価値は互いに比較され、計られるのであって、技術上、これらの金量を、それらの度量単位としてのある固定された金量に関係させる必要が大きくなってくる。この度量単位そのものは、さらにいくつもの加除部分に分割されることによって、度量標準に発展する。金や銀や銅は、それらが貨幣になる以前に、すでに、このような度量標準をそれらの金属重量においてもっている。たとえば、1 ポンドは度量単位として役立ち、それがさらに分割されてオンスなどとなり、他方では合計され

てツェントナーなどとなるのである。(p129)

(7) 価値の尺度及び価格の度量標準として、貨幣は二つの全く違った機能を行う。

貨幣が価値の尺度であるのは、人間労働の社会的化身としてであり、価格の度量標準であるのは、固定した金属重量としてである。それは、価値尺度としては、種々雑多な商品の価値を価格に、即ち、観念上の金量に転化させるのに役立ち、価格の度量標準としては、この金量を計量する。価値の尺度では諸商品が価値として計られるのであるが、これに対して、価格の度量標準は、いろいろな金量を、ある一つの金量で計るのであって、ある金量の価値を他の金量の重量で計るのではない。価格の度量標準の為には、一定の金重量が度量単位として固定されなければならない。この場合には、…度量比率の固定性が決定的である。従って、価格の度量標準は、1 つの同じ金量が度量単位として役立つことが不変的であればあるほど、その機能をよりよく果たすのである。

価値尺度として金が役立つことができるのは、ただ、金そのものが労働生産物、つまり可能性から見て1つの可変的な価値であるからこそである。(p130)

(8) 第一に明らかな事は、金の価値変動は、金が価格の度量標準として機能する事を決して妨げないということである。金価値がどんなに変わったとしても、いろいろな金量は相変わらず互いに同じ価値関係を保っている。…そして、価格ではただいろいろな金量の相互の関係だけが問題なのである。…このように、金は、その価値がどんなに変動しても、いろいろな価格の固定した度量標準としては、常に同じ役立ちをするのである。

(9) 金の価値変動は、また、金が価値尺度として機能することも妨げない。金の価値変動は全ての商品に同時に起きるので、その他の事情が同じならば、金の価値変動は諸商品の相互の相対的価値には変化を起こさないのである。(p131)

(10) 諸商品を金で評価する場合、そこに前提されているのは、ただ、一定の時には一定量の金の生産には一定量の労働が必要だということだけである。

(11) 商品価格が一般的に上がるのは、貨幣価値が変わらなければ、商品価値が上がる場合であり、商品価値が変わらなければ、貨幣価値が下がる場合だけである。

(逆の場合は逆になる。) …たとえば、その価値が貨幣価値と同程度に上がる商品は、同じ価格を保っている。

(12) そこで、また価格形態の考察に戻ることにしよう。

種々の金属重量の貨幣名は、いろいろな原因によって、次第にそれらの元来の重量名から離れてくるのであるが、その原因のうちでは次のものが決定的である。(1) 発展程度の低い諸民族における外国貨幣の輸入。たとえば、古代ローマでは、金銀の铸貨は最初は外国商品として流通していた。このような外国貨幣の名称は、国内の重量名とは違っている。(2) 富の発展につれて、あまり高級でない金属はより高級な金属によって、価値尺度機能から駆逐される。銅は銀によって、銀は金によって。…例えば、ポンドは、現実の1ポンドを表す貨幣名であった。金が価値尺度としての銀を駆逐するやいなや、同じ名称が、金と銀との価値比率に従って、たとえば1/15 ポンドというような金に付着する。貨幣名としてのポンドと、金の重量名としてのポンドとは、いまでは別なものになっている。(3) 何世紀にもわたって継続的に行われた王侯による貨幣変造。これは铸貨の元来の重量から実際にはただ名称だけをあとに残した。(p132)

(13) このような歴史的過程は、いろいろな金属重量の貨幣名がそれらの普通の重量名から分離

することを国民的慣習にする。貨幣度量標準は、一方では、純粋に慣習的であるが、他方では、一般的な効力を必要とするので、結局は法律によって規制されることになる。貴金属の一定の重量部分、例えば、1オンスの金は公式にいくつかの可除部分に分割されて、それらの部分にポンドとかターレルとかいうような法定の洗札名が与えられる。

(14) こうして、価格または商品の価値が観念的に転化されている金量は、いまでは金の度量標準の貨幣名または法律上有効な計算名で表現される。そこで、例えば、1クォーターの小麦は1オンスの金に等しいと言うのに代わって、イギリスでならば、それは、3ポンド 17シリング 10ペンス 1/2 に等しいと言われることになるであろう。このようにして、諸商品は、自分たちがどれだけに値するかを、自分たちの貨幣名で互いに語り合うのであり、そして、貨幣は、ある物を価値として、従って、貨幣形態に、固定することが必要な時には、いつでも計算貨幣として役立つのである。(p133)

(15) ある物の名称は、その物の性質にとっては全く外的なものである。ある人の名前がヤコブだということを知っても、その人については何も分らない。それと同じに、ポンドやターレルやフランやドゥカートなどという貨幣名では、価値関係の痕跡はすべて消滅している。これらの不可思議な章標の秘義についての混乱は、貨幣名が商品の価値を表すと同時に或る金属重量の、即ち、貨幣度量標準の可除部分をも表すので、ますます甚だしくなる。他面では、価値が、商品世界の雑多な物体から区別されて、このなんだか分らない物的な、しかしまた純粋に社会的な形態に達するまで発展を続けるということは、必然的なのである。(p134)

(16) 価格は、商品に対象化されている労働の貨幣名である。…商品の価値量の指標としての価格は、その商品と貨幣との交換割合の指標だとしても、逆にその商品と貨幣との交換割合の指標は、必然的にその商品の価値量の指標だということにはならないのである。…というのは、第一にそれは小麦の価値形態、貨幣であり、第二には小麦と貨幣との交換割合の指標だからである。生産条件が変わらないかぎり、または労働の生産力が変わらなないかぎり、相変わらず1クォーターの小麦の再生産には同じだけの社会的労働時間が支出されねばならない。このような事情は、小麦生産者の意志にも他の商品所持者たちの意志にもかかわりがない。だから、商品の価値量は、社会的労働時間に対するある必然的な、その商品の形成過程に内在する関係を表しているのである。価値量が価格に転化されるとともに、この必然的な関係は、一商品とその外にある貨幣商品との交換割合として現れる。しかし、この割合では、商品の価値量が表現されうるとともに、また、与えられた事情のもとで、その商品が手放される場合の価値量以上、または以下も表現されうる。だから、価格と価値量との量的な不一致の可能性、または、価値量からの価格の偏差の可能性は、価格形態そのもののうちにあるのである。このことは、決してこの形態の欠陥ではなく、むしろ逆に、この形態を、一つの生産様式の、即ち、そこでは原則がただ無原則性の盲目的に作用する平均法則としてのみ貫かれうるような生産様式の、適当な形態にするのである。

(17) しかい、価格形態は、価値量と価格との、即ち、価値量とそれ自身の貨幣表現との、量的な不一致の可能性を許すだけではなく、1つの質的な矛盾、即ち、貨幣はただ商品の価値形態でしかないにも関わらず、価格がおおよそ価値表現ではなくなるという矛盾を宿することができる。それ自体としては商品ではないもの、たとえば良心や名誉などは、その所持者が貨幣と引き換えに売ることのできるものであり、こうしてその価格を通じて商品形態を受け取ることができる。それゆえ、あ

るものは、価値を持つことなしに、形式的に価格を持つことができるのである。ここでは価格表現は、数学上のある種の量のように、観念的なものになる。他方、観念的な価格形態、例えば、そこには人間労働が対象化されていないので少しも価値のない未開墾地の価格のようなものも、ある現実の価値関係、またはこれから派生した関係をひそませていることがありうるのである。

(18) 相対的価値形態一般がそうであるように、価格は、ある商品例えば、1 トンの鉄の価値を、一定量の等価物例えば、1 オンスの金が鉄と交換されうると云うことによって、表現するのであるが、決して、逆に鉄のほうが金と直接に交換されうるということによって表現するのではない。従って、実際に交換価値の働きをするためには、商品はその自然の肉体を捨て去って、ただ観念的な金から現実の金に転化しなければならない。たとえ商品にとってこの化体が、ヘーゲルの「概念」にとっての「必然」から「自由」への移行や、ザリガニにとっての殻破りや、教父ヒエロニムスにとっての原罪の脱却よりも「もっとつらい」ことであろうとも。商品は、その実在の姿（例えば、鉄）という姿のほかに、価格において観念的な価値姿態または想像された金姿態をもつことはできるが、しかし、現実には鉄であると同時に、現実には金であることはできない。商品に価格を与えるためには、想像された金を商品に等値すればよい。商品がその所有者のために一般的等価物の役を果たそうとするならば、それは金と取り替えられなければならない。

(19) 価格形態は、貨幣と引き換えに商品を手放すことの可能性とこの手放すことの必然性とを含んでいる。他方、金は、ただそれが既に交換過程で貨幣商品として駆け回っているからこそ、観念的な価値尺度として機能するのである。それゆえ、観念的な価値尺度のうちには堅い貨幣が待ち伏せしているのである。(p138) 第一節 価値の尺度 了

2025/07/30